

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

|            |   |
|------------|---|
| Title      | 冬の繪：文苑  |
| Author(s)  | 紅鱒  |
| Citation   | 龍南會雜誌， 1 1 9： 3 1 - 4 1   |
| Issue date | 1907  |
| Type       | Departmental Bulletin Paper   |
| URL        | <a href="http://hdl.handle.net/2298/6004">http://hdl.handle.net/2298/6004</a> |
| Right      |   |

## 文苑

### 冬の繪

紅　　鱗

文

「あなた、茫乎ぼんやりして居らつしやるぢやありませんか、確乎しつかりなさいましよ。女一人の宅で、茫乎するなんて、チョツ男でないわ

夜陰に警板の一句を吐いて、男をしろりと見し腫に厭味と云ふもの微盡も無く、眉よほびかに延んだ儘、煙草を薄き藍に吹いた、女は芳紀の二十四五、白茶に枯れし芒の模様、光を抜きし一樂の、給に重ねし全じき給、裾長らかに坐りしが、枕の罪か片鬢の、平めき崩るほつれ毛の、耳を掠めて煙らんばかり。苦にする風情は格別無く、はらりと積きし衣紋の項、後姿をまわつて見たら、背に愛嬌の黒子も見えやう。

「確乎しては居ますがね、然しどうして是れが、茫乎せずに居れるものですか、僕はどうし此處に來とるんか、其れさへ僕には全く理由がわからんのです、恐らく、これは……」

「恐れてゐらつしやる様ですね、あなたも、立派に男でせう、何のこわいことが、」

「さ、さう云ふ意味では無いですけど、」

「艶えんにからむは科ですから、恐い思ひはさせませんよ。」

もろつて、此方へた寄んなさいな

「や、もう何卒」

「足が御痛ぢやいけません、さあ、た敷きなさいましよ。と云つても是れですからね。一人世帯に客分は贅澤過ぎてわたしは嫌ひ、無禮は御免の、さうぞ、是れへですよ」

トバタンと叩いて、軽くすべれば、絹と絹、こぼる裾のさや／＼を、掻きも合せて、菫の色の濃紫、目に染む程に氣爽やかな、薄團は厚き紋縮緬、綴糸くびれて、ふくやかな。

「た敷きなさいましよ、」

と云つても男、

「や、どうぞ、も」

「女の座つた薄團には、脂が移つて、其れで、汚らばしいとたつしやるんですか、」

「……………」

「ぢや、其んなに、氣強はになさらずも、折角敷いては下さいませんか、」

「ねも結構、」

「結構ぢやありませんよ、あなたは、其れで結構だとたつしやつても、進めた私かつぶれます、妾は何の結構ですか。さ姉の結構の様にするのが、まあ失禮ですが、あなたは年下、弟ですわね」と笑つて「するもんですよ。姉さんの結構になるやうにさ、」

睨んだ瞳が、流れて齒が見え。

「御意に反くもいかゞですから、御免は蒙りもてませうが、あなたは、女ではありませんか、女のあなたが、た敷きが無くて、男の僕が、どうして、敷けるものですか、どうぞ、さ、其の儘、僕は是れで結構です、男です、」

「ホ、頼もしいわね、」

だが、姉さんと思はんで、矢張り女、と、わたしを思つて、あなたがまあ、ホ、随分のろい方ね、屹度喜ぶ人がありませうよ、わたしは、もう、其んな年ぢや無いですから、嬉しがらせは、無用ですよ、

「困りましたなあ

寂しく笑つて腕を組む

「わいやなら、わたしで、御免を、しませうが代りに怒つて上るんですよ、餘つ程、磐若に見ねるでせうね。笑つても、わたしを、あなたは、恐いものゝ様になさつて居らつしやるぢやありませんか。怒らせでも、なさりやうならですよ、さ其の時は、白魚の如き人差指を「盤若所か、さこれですよ、夜叉ですよ、夜叉で、輝くばかりの額の上に、美しこれは紅葉獵、鬼女にもあらぬあでやかさ。其の指先の曲れる少しく、其の端のびて光となつて、男の眼に射し込まば、眼球乍ら爛れにたゞれ、血の紅は炎となつて、筋骨其の座にとろ／＼と、流れやせむと、凝はるれば、男楯付く氣控けて、一膝しざりの諾々と、わざ／＼膝の下と云ふ所に、しいて見れば、氣味の悪きは、ほの／＼と、残つて暖かいと云ふ所なり。」

「よう、敷いて下すつた。御禮に一献さいたて酒事でも。真似を上つて下さいませな。」

「不調法なんですから。」

「上さんのなら、わたし、獨りで頂きますよ、」

突と立つ女、納戸の方にも行くと見るに、ギイと開きの襖の音は、つい目の前の佛壇の、眞下の銀風呂。勝手は別に無いらしい。一室ま作りの離れである。

何にやかや、此の下風呂の乱れ函、解きたる帯を束ねしも、抽き散らしたる秩の文も、糸の切れたる箏の琴も、あらで、一樽新しき、杉の匂ひを片手に立つて、靜かにふれば、

「すつかり無いんぢやありませんか、失禮ついでに、あなた、暫く此處に、留守居をして下さいね  
退窟忘れの玩具箱に繪葉書帖えはがしなんて云ふものは、生憎なんですから、火鉢の灰に書く位で、之間に合せを願ひます、窺いて見る娘も無いんです。遠慮は入りませんよ（私語）とでも、お書きなさいな  
障子の破れから風でも見たら、直ぐ様消して終へなら、所詮うしせ灰なんですから、罪は格別残りませんよ。」

肩からしろりと帯の歪みを見るにもあらず。

「ぢや、あなた、行てまわります」

からりと外と面の雨戸を操れば、一枚たぼろの月影の、障子は、霞にはのやかな。さら／＼と、淺瀬の、波が聞こえてはいる。

「ねらく早いぢやありませんか」

「影ですわね、風に吹かれて、早いんですよ。一寸あなた、後の縫目が見えますか」。

「に」

項を前にそろりと立つた絲珍の帯の詰ひ目に、ゐしきは隠れて細つそりし。

「ホ、戯談ですよ。樽は空なんですよ」。

と付かぬ對句を、庶きつて

「途中で、すつかりなんですか」

男一句を先手に出た氣。

「浪速」の浦の鱸ぢや無いんで」虫齒の金がきらりとする。「それでも女ですからね」兩手を頬に、

なつとりして

「人目は些し憚りますよ」。

橋へ出ると、佳い月ぢやありませんか。柳が茫と煙りこんた、間にちらめく灯が見ゆる筈なんです。其の灯の見ゆるが、最中屋つて出入りの酒屋なんですがね。月の明りに薄れて見えず、と云ふんでもありますまいが、柳ばかりが茫として今日はあかりの見えませんか、もう更けたんでせうね。叩いてやるのも、夢に科だと思つてね。其の儘空樽、提げてのホ、逆戻り」と自分と嘲つて

「女ぶりの悪いことね」。



「ねあなた、此れは、僕のが、どうして是れが………」

「ネ、端唄の本でせう」

口を奮めてホッと煙

「失敬な、いゝ加減になさい。此れはハイネの翻譯です。」

此の男新詩人名を象雄きさると云ふ

「ハイネ、返事の良いた娘だわねね」

「失敬な、あなたは、僕を愚弄して居る。僕は學生です（學生ですに力を入れて）

「むきになつては、ねねまあ、ホ、た笑止ね學生ですも無いもんだ。一寸斯う御覽なさいな、女の着物を召してらつして、學生ですなんて、力味める顔でもありませんわね、

「ね」

見れば口悔し、なまめき立ちたる女物、雨に散りたる山吹を、溶いて流しと荒目の瀧縞、其れども見えて華美なる八丈、せなにすべりの紅絹裏を、今に悔ゆるも詮なき事、女名はた仙と云ふがかいまきである。

象雄は袖巾ゆきの足らざれば、あらはなる腕を耻ぢて組みもせしが、女と見ゆる色白のやさ腕、更に壓しもきかず

「あゝ、色々厄介になりました。着物と本を返して下さい、もう失禮します。

「ホ、た勝手に、本は返しはしませんよ。かたみに欲しいと云ふれ子があるんですからねね」



人の背でも打つ見ねに、た仙、小本を叩いて懷に入れる。

「紀念につて理由がわからん」

「理由が無ければ、どうして、あなたは、此處に來ては居らつしやる。此處は、虚藏庵つて云ふ庵室ですよ」

「ね、庵室」

「わかりますまいが、わたしは、髪を切ら無い尼なんです」

腰を落してかくりとする。袂を膝にきちんとし

「あなたは一人心中なすつたな」

詩人些かからずギョツとしたが、唾を吞んで

「ね、そんな馬鹿な」

「でも一人で、あなたは水に溺れてゐらつしたらう。わかりませんか。一寸御召しを御覺なさいな。暫く息を潜ませて「其れはわたしのかいまきですよ」

「ね、あなたは、私を非道い事をなすつた」

「ホ、勿躰無いわね、そんな薬は殿方ですよ。」片頬にうすく笑みを含んで「邪推はひどい罰當り。本家のね嬢さんに助けられてゐらつしたではありませんか。一人心中も無いものね」

隅に瞳が靜かに寄ると、チンと再び圓らに据わて

「ぢや、すつかり言つて了まへませうか。あの川なんですよ。臚にね。」  
一服立膝にすひ付ける。輪が色々に霞を打つて。しめれる室の氣に沈むと、煙げに左の手に消して、  
右が後ろの障子にのびた。

月がねばろに霞に溶けて、霞がびつしより川より宙に、月がうつつてばやけた底を、川が流れてしめやかな。虚藏庵に一時が過ぎてゐる。

## 三

土間に電氣がハッと消ぬる。森としたが春は矢張寂しく無い。棧敷に煙草の赤いのが、ほつとり見えて、煙が横に流れると、隣の髪から間ひが忍んで、重ねた踵のしびれをすべると、さらりと觸れた袂が絹で、何んたか闇に氣がせて、膝に拳を固く握つて眼を据ゑて、睨んだ所が、舞台が暗で仕方が無く、逆光線の青いのばかり、十程並んだ真下の壺に、全んなじ様な後姿、中にさらりと光つたのが、櫛の眞珠と氣をとめると、後に子供がキャツと泣いた。肩から一寸振り向くと、毛糸の頭巾を抱きしめた、胞のあたりの暗いのがふつくり影の乳房である。

トまた舞台に霞が茫と現れた。

雲が流れて日照雨、日脚がさつと後から、霞が今は鮮やかで、隣に女の髪が光つて片頬に耳のたぶが白い、

見る間を霞が紫に、なるとさらりと胡蝶になつた。器樂の聲が闇の上から聞えて来る。雙の羽袖をひら／＼と花の香其れに動くを見るも、匂にうつる影も無く、翼の紋がくる／＼と、旋風つむじに狂ふ春

文

の水、蝶が獨りに舞うのである。

舞うては居ない氣の故だ。浴びせる後の光線の中に怪しき糸が隠れて居つて光の波を操るのだ。

蝶はべつたり闇の幕、縫れた様にちんとすると、はらりと羽が左右へのんで、見る間にする／＼二丈、末が小風にさゝめいて、雲に化けむと見る塗端、花がはやけた薄紅、光に色が颯とすると、蝶は乙女の舞になる

はらり／＼雲の袖、はら／＼はらりかすみの袂

雨は器樂の糸を乱して、裾ながらに空の塵、拂へば青きあをやぎの、糸とも見えてしなやかな、漏るゝを高く風に揚ぐれば、下より變る光の綾、肉美しき脛の色、深は秘めてはらりと裳、こぼれし水の流るゝ如く、末廣がりに地を這へば丈を落してなやかに、腰は後へに反りを見せ、翠髪紅裾に纏りて、身はさながらに虹の橋、枝垂るゝ藤の薄紫、影は、末濃に滴つた、

(矢張り、手品なんぞでせうか)

(胡蝶の舞と云ふんです)

(模様が衣に三十六遍變るんだつと)

(よ、波に乱れの藤模様)

(佳い縹緖だわねね)

(叱ッ)

滴るゝ影の陽炎と燃えて岡邊の春の晝、川に流した花束の、波に崩れし渦の花、渦巻く袖をくる／＼

と、よりを袖かに糾へば、花はしばれて、雫蜜の、くちびる紅を甘く笑つて、白魚が浮いたらつ  
きもせう。頬に乱花の髻様がさした (つゞく)

## 對鶯曲

まつむら

『一』

わりなしや

曙染の唐草に

細糸ふりし琴とりて

つらき愁思に觸れざれの

榮はなきわざらに倦じては

ひとり黙想の興に入る

さなり今

夕蕭條の春の御衣

紅るやゝに褪せぞめて

紫長き萬象の影

冷ねの唇ひらきては  
あゝ誦しなんか逝く春の曲

わび雲よ

いづち消ね行く

紅梅つめたう且散りて

そとやは風に薫すれど

黄昏しらす袖かみて

柱に倚るに寂寥ふかし。

『二』

見よ混沌の野